

No.25 二王子岳 春季登山講習会

1976年(昭和50年)4月22日～24日



＊新発田高校が幹事校となり、幕営地の設営を行った。幕営地は、1100m付近の尾根上。講習会前日に幕営地に入り、目隠しのある女子トイレを設置した。翌日は幕営地付近から大バリ沢に一旦下り、沢沿いに頂上へ直登した。面白いバリエーションルートであった。

二王子岳 新人歓迎登山

1976年(昭和50年)4月?



No.26 国上山～弥彦山～角田山 国体県予選
1976年（昭和50年）5月4日、5日
同行 坂上 高橋

No.27 五頭山～金鉢山～折居 新人歓迎登山
1976年（昭和50年）5月24日、25日



縦走路から金鉢山への廃道を分ける。道はわりあい鮮明であり、五頭小富士を過ぎると、道は一層鮮明になる。写真右；五頭小富士 命名；昭和51卒藤田さん

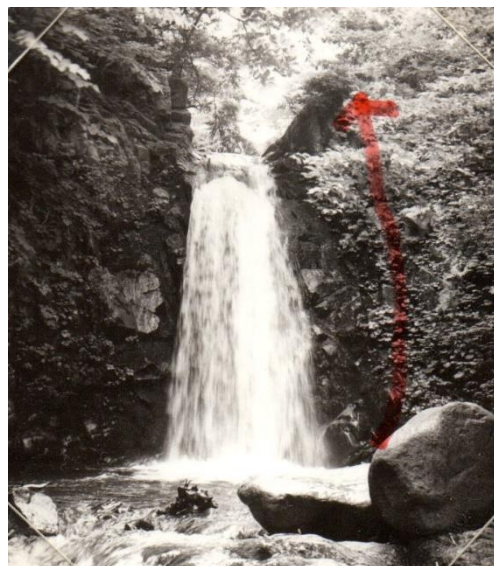
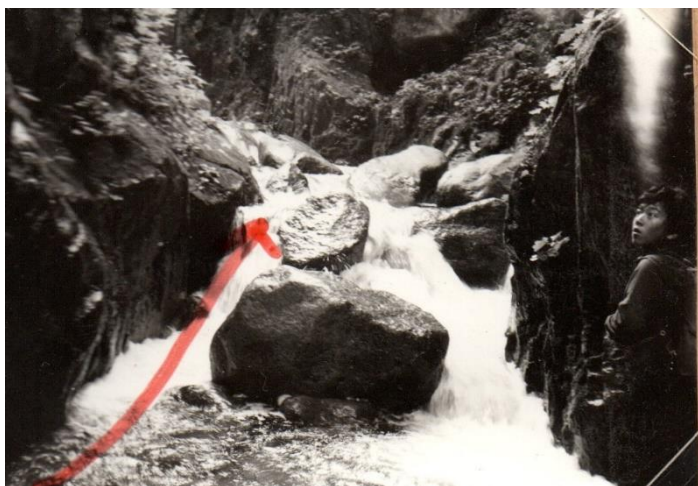


写真左；中々山尾根(仮称)を見る。谷は深く急で尾根も険しい。ここには、地図上に600m地点まで破線が付いている。写真右；金鉢山山頂からの下りは道が鮮明に付いている。折居川に近づくとき道が不明瞭となる。折居川に下りるとすぐに河原状になり、わずかにトイ状になった2、3カ所を除けば河原の単調な沢である。唯一の変化と言え、この20mのナメであろう。ここを過ぎれば、再び河原の道を左岸にたどり、やがて砂防ダムにぶつかって林道が始まる。

No.28 大荒川本谷～権四郎沢～松平山

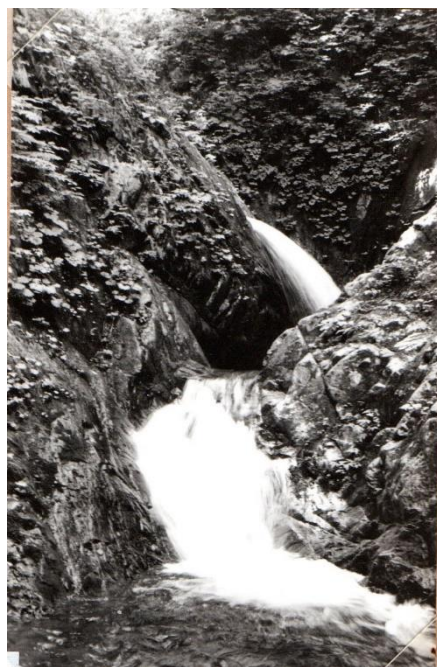
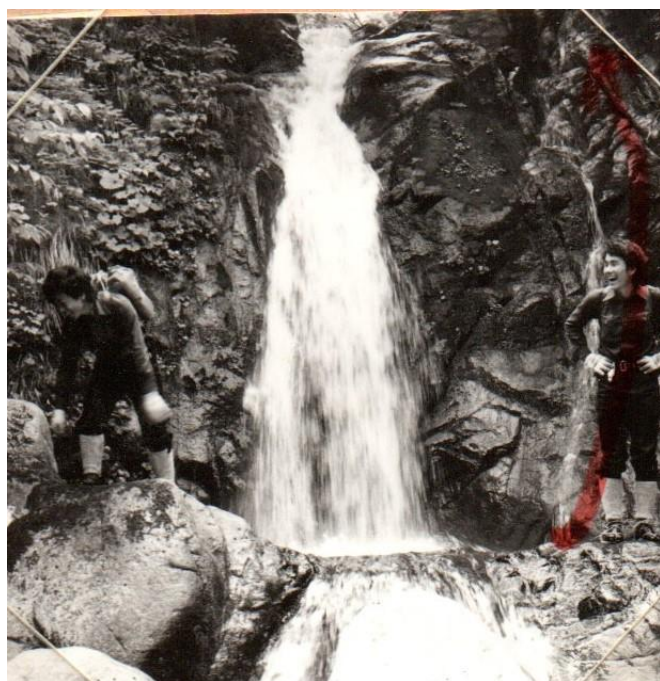
1976年（昭和50年）6月15日

同行 島津 西小倉沢隊；坂上、遠藤、高橋



写真左；三階滝を過ぎて沢に入るとすぐにセビアとなり、そこにかかるF1 1mの滝。兩岸とも膝上の水で楽に越せる。ここを過ぎると例の深い釜をもったF2で左岸水際にホールドあり。

写真右；奥止めの滝F3 5m。手前で広手沢が出合っている。左岸より直登。



写真左；西小倉沢出合にある西小倉沢F1 芳兵衛の滝 8m。左岸より直登。写っている坂上、遠藤とここで別れ、互いの健闘と無事を祈る。

写真右；F4 2段6m。落ち口がゴルジュで直登できず、また、左岸に巻き道。この滝を越えると長倉沢が出合う。



写真左；F 5 2段5 m。左岸高巻き

写真右；F 6 6 m。兩岸急に狭まり立派な滝。この滝の前に1 mほどの小滝を乗り越え、左岸の岩壁から巻く。ホールド多数あり。ルート中最も巻くのに時間がかかる。



写真左；ヤゲン1段目の滝F 7 5 m。大きな釜を持っている。ヤゲンの大滝は1本約15 mの滝で深い切れ込んだ岩壁をもっており、人を容易に近づけない滝である。この姿を見ただけでも右岸の尾根の出っ張りからしばらく登らなくてはならない。写真の線は前に調査隊のとしたルートである。落ち口は大変磨かれたナメである。

写真右；F 8 15 m。F 9 17 m。ヤゲンの大滝3段35 m。左岸高巻き。道あり。

＊実際はヤゲンではなく、「越後野誌」にある「入り3階滝」と思われる。



写真左；F 1 0 4 m。深いゴルジュ。左岸高巻き。

写真右；F 1 1 8 m。岩の城。両岸オーバーハング。下は、大きく深い釜。全く取り付くすべがない。右岸高巻き。



写真上左；スグノ沢出合

写真上右；大日沢出合から見た本流の様子。本格的なV字谷を示し、入ってすぐにF 1 2 2 mがかかっている。取り付けずに一旦大日沢の大石を乗り越えて中間尾根に出て、左岸を高巻く。

*このV字谷が小ヤゲンである。



写真左；高巻きから懸垂下降で本流に降り立つ。岩の城のような本流の中を通過してすぐにF 1 3 2 mに出る。両手、両足を突っ張って越える。



写真左；V字谷を出ると本流は右に屈曲して本流核心部の入り口。ここから先約50mの飛瀑で、奥にF14 10mがかかっている。右の小沢を詰めて尾根に取り付いたが本流に降りれず権四郎沢まで藪漕ぎ。核心部にF15、F16、

F17各10m。 ＊ここが大ヤゲンである。

写真上右；核心部を避けての藪漕ぎを経て降り立った権四郎沢。



写真左；権四郎沢に入ってからすぐに現れた沢登最後の大きな滝。左岸から小沢が入りそこを少し詰めてから高巻いた。

写真右；滝を越えるとすぐに現れた雪渓。この先沢は2分され右。また2分され両沢とも4m位の滝。右を

行く。この滝を越えると藪漕ぎなしで松平山頂直下に出た。

No.29 二王子岳

1976年（昭和50年）7月

No.30 湯の平

1976年（昭和50年）8月10日 単独

No.31 飯豊連峰 夏山合宿

1976年（昭和50年）8月23日～26日

東赤谷→湯の平→センタク平→本山・大日岳往復→梶川尾根



写真上；センタク平

写真左；オーイン尾根



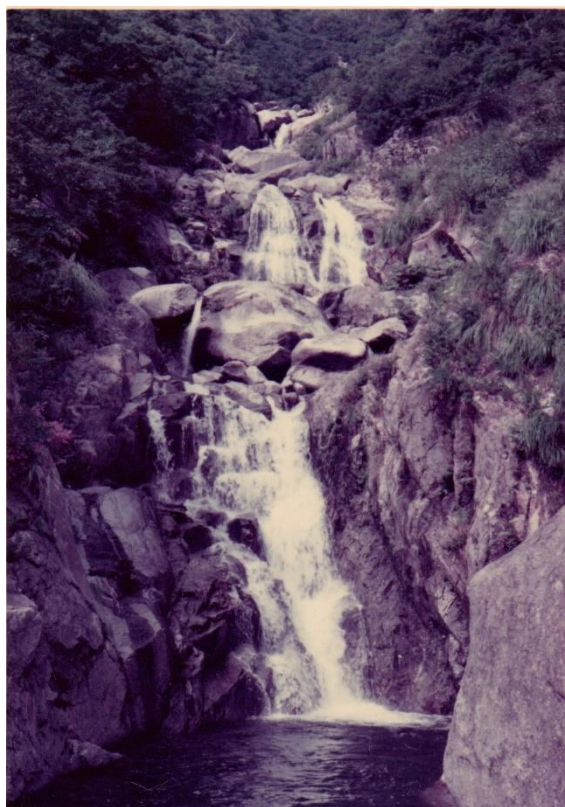
写真上；天狗の庭

写真右；御西～大日の稜線



No.32 七滝沢

1976年(昭和50年)9月14日、15日 同行 古川



写真左；巻き道からの七滝

写真上右；七連の滝



写真左；七連の滝2段目 写真右；遡行2日目中流部締めの大滝

*幕営地とした七連の滝上部の暖流帯にロックフィルダム調査の飯場があった。高校生が上がってきたとびっくりされた。

No.33 北ノ沢

1976年（昭和50年）10月

No.34 焼峰山

1976年（昭和50年）10月

No.35 五頭スキー

1976年（昭和50年）12月12日

五頭高原スキー場新設オープン前週 無料でリフトに乗せてもらう

冬山合宿 五頭山

1976年（昭和50年）12月25日、26日



烏帽子岩にて幕営



No.36 俎倉スキー

1977年（昭和51年）1月

No.37 米倉～金鉢山～松平山～五頭山

1977年（昭和51年）3月10日、11日

同行 古川

14日快晴をもって夜が明けた。駅に着くと新発田終着の列車が着いたときで、古川が赤谷線に乗るのが見えた。二人で金鉢までの長い稜線を見ながら、とりつきはどうするなどと話している間に米倉に着いた。ところどころ雪が残る林道を30分ばかり行くと荷が重く足が思うように運ばぬ。どうにか終点まで来て正面平板な尾根の残雪を頼りに稜線に出る。

*写真左；稜線上から拾ってきた残雪。ピークは荒城山。



この稜線こそ山旅のスタートにふさわしい劇的な場所であった。東に二王子が天をつくばかりに鋭いピラミッドを立てて、奥には大日まで見え、さらに赤津、蒜場と飯豊前衛の名山が見えたのである。米倉付近から見る二王子岳は新発田からみる肩を張り裾野を広げた「たおやかな峰」と違い、底辺のしっかりとした鋭いピラミッドである。そのピラミッドの上には一つのレンズ雲。前面にはうっすらと霞のかかった越後平野。それらを横切る加治川は、まだ昇りたての朝日に水面を輝かせて流れる。実に詩的情緒のあふれる場所であった。

このつかの間の安心はたちまち猛ヤブと重荷にかき消され、苦しみの連続の北部稜線となった。金鉢山はいっこうに近くならず、起伏の多い数々の稜線の峰々を前衛に置き鎮座している。それでも真木山に着く頃から道らしきものが現れ、また残雪量も多くなり、ホ

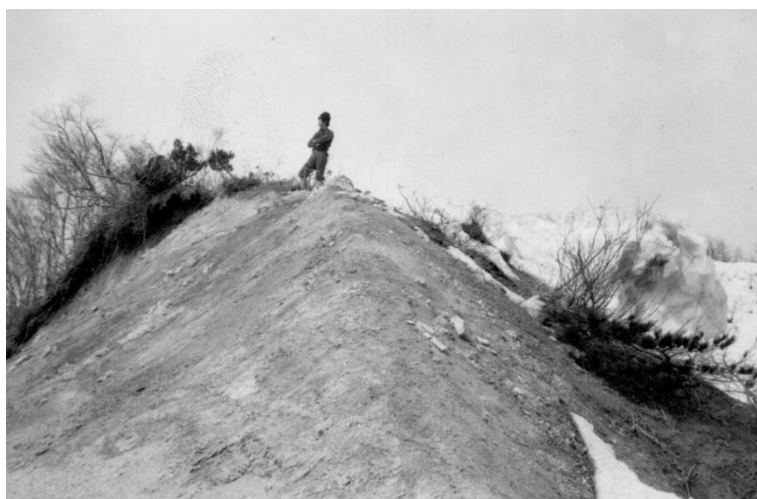


*写真左；正面台形状頂が穴マクリ、真木山。花の木平からの撮影と思われる。



ッとするが… この辺から頭をもたげる不安は、金鉢山北面の巨大な亀裂であった。新発田から見て、また読図でも、確かに急ではあるが登れることはあるまい、五頭小富士の突起越えにつぐ難関とみていた。だが、その概念は破れた。ただ前進あるのみ。

その前に難関が生じた。巨大なガレ場である。そこは、尾根の西面が沢の源頭部のガレ場によりそぎ落とされ、一種のキレット状になったところである。キレットの最低部まではなんとか降りられそうであるが、



その上はヤセ尾根である。その尾根の上部は今にも落ちそうな雪堤があり、吊り尾根は雪底が発達し、正面の白々とした二つの沢による雪壁は35度から40度の傾斜で、しかも北面で堅雪が予想される。とにかく、ヤセ尾根に雪堤が始まる中間部まで行き、そこから急斜面の沢に降りることとする。ヤセ尾根は予想に違わず危険なもので西面のガレ場は尾根上

まできれいにそぎ落ち、はるか100mほど下まで落ちている。途中には大石がごろごろしていた。中間部より急斜面をトラバースする。上部に行くにつれて堅雪となり、キック

ステップも容易でなく、アイゼンがほしいところだ。



*写真左；我々がP 2と読んだコマタ(荒川山)。大ガレ場も見える。

*写真右；コマタへの斜面のトラバース。現在は上の尾根に登山道がある。

とにかくこのP 2直下の難場を乗り切るとあとはもう金鉢が目前である。景色は飛躍的によくなった。P 2頂上では、新人歓迎登山と同様の景色。さらに金鉢の異様は我々を遠ざけるように立ちはだかる。ここから稜線は平坦になり、赤谷側に1.5～2m位の雪庇が現れるようになった。気軽な稜線散歩を楽しんでいる内に、2年時の折居道発見時に名付けたダラダラ峰に着く。予想していたようにそこは広い雪原であった。その雪原の水平面に金鉢山の垂直な壁がすくっと立ち、対称的な風景を醸し出している。ここから見る



金鉢山は、「白い巨峰」である。頂上直下の雪壁には、巨大な亀裂が見える。北斜面直登は無理である。そこで折居川源頭の沢を登路に選ぶ。金鉢山最後の登攀にふさわしい幕切れであった。雪は固く締まりキックステップも容易ではないが、ただ白のみの雪面に日が差し込みキラキラ輝く。さらに沢内の光景が神秘さを増す。

苦しい源頭の急登を階段登高で登り終えると、そこはまるやかな白い金鉢山の山頂であった。強風吹きすさぶ冬を過ごしてきた寒々とした木々が、折からの春の陽に輝いて見え、西の尾根は一片のくぼみもなくただ下界に白々と尾を引いているように見える。南の五頭稜線は累々とした雪庇を従えながら重厚にその稜線を広々とした肩をもつ松平山に伸ばしている。東の方は、内ノ倉ダムを中央に、左に二王子、右に赤津、焼峰、蒜場の前衛を従える飯豊連峰が巨大な山塊のうねりを見せる。

金鉢山に20分ほどいてこれから我等がしなくてはならないことは、小富士への挑戦である。この計画を立てる前から最大の難関と思われた。実際に間近で見る小富士は、予想以上に悪かった。まず越後平野側は稜線上からぐっさり雪がそげ落ちており、60度くらいの急傾斜、赤谷側は雪崩の巣でありピーク直下から亀裂が入り非常に不安定で、頂上下

は1～2m位の雪の壁となっている。小富士の直下までに行って、そばによるとブッシュが意外に出ており、なんとか行けそうなので、古川が先に50cm幅の不安定な雪を伝っていった。踏み抜いたら滑落しそうな場所だが、以外にしっかりしていてキックステップをしても大丈夫だ。以外に楽だなんとか越せそうだと考えながら登っているが、下を見ると足が震え、しっかりとブッシュを握り、ピッケルを深く突き刺し進む。そして、いよいよ最後のワンステップのところに来た。上を見ると、古川が最後のワンステップに必死になっている。ピッケルを上部に突き刺してステップを刻んでいる。やがてもう一歩というところでピッケルを抜こうとしているが抜けない。あの不安定な体制で、もし急に抜けたら… 考えるだけでぞっとする。しかし、彼は最後の難関を突破しピークの上に立ったのだ。胸をなで下ろすが、次は自分の番だ。ピッケルを上部に刺し、ピッケルを頼りに体を持ち上げる。これの繰り返しだ。あともう少しだ。ここで焦った。ここから前へ進めないのだ。上にいる古川の顔も心なしか青ざめている。ここで落ち着かなければならない。ピッケルでホールドを二つ削り、これを手がかりにして這い上がった。ついに突破した。あとは5ステップ急な斜面を登るとそこは頂上であった。ふと我に返ると古川は大変な心配であったという。落ちたらどうしようなどと考えていたそうだった。その点は自分もおんなじだ。このとき、本当にパートナーとはいいいいものだったと思った。

小富士の南面は、北面に比べてなだらかな斜面であった。この斜面を一気に下り、ここを本日のビバーク地とする。場所は全くよいところで、雪庇の直下にもかかわらず雪壁になっておらず、その上、斜面がそのまま奈落の底へという場所でもなく、下部に棚がある場所だ。暮れなずむ越後平野から雪庇の下に身を躍らせ、さっそく雪洞を掘る。掘り始めてから1時間ほどで完成。その頃はすでに飯豊はその姿を闇に没し始めている。稜線は越後平野からの吹き上げ風が音を立て、ザックにしたたっていた水滴は凍っていた。そそくさと雪洞に入り、幸福の証とも言うラジュウスの音を聞き、自然に山に同化していく2人の姿を見ていた。丸い雪洞の窓から、赤谷の灯か、下界の暖かさを象徴するように点々と輝いている。

翌朝5時起床。また新しい日が始まる。雪洞から顔を出すと昨日と変わらぬ飯豊連峰が白くたたずみ、その上には彗星（＊ウエスト彗星）がかすかな白い尾を引いて、飯豊連峰を越えようとしている。その彗星が消える頃には、赤い太陽の陽が空を情熱の色に染め上げた。スープのない餅入りラーメンを腹にかき込み、雪洞から這い出る。一夜を明かした雪洞に別れを告げ、松平山に向かう。ここから五頭までは勝手知ったる雪の稜線。晴れていれば天国だ。900mを越えると赤谷側の雪庇はさらに規模を増し、3m位張り出している。松平の白い山頂を踏む。これで、我々の初期の目標は達せられた五頭山で下山し、阿賀野川までの完全縦走はできなかったが、この稜線の記録は、吾が部では今まで見当たらない。芝田の山を登るものにとって、金鉢山から下りるのこぎりのような尾根は、誰しも興味を覚えるのではないか。

＊どうしたか分からないが、クライマックスの写真が残っていない。フィルム忘れであったろうか？残念でならない。

春山合宿 二王子岳

1978年（昭和51年）3月25日～28日



No.38 釜が沢

1977年（昭和51年）5月

No.39 五頭山～松平山

**1978年（昭和52年）2月28日、29日
同行 古川**

No.40 五頭山スキー

1978年（昭和52年）3月15日 単独